

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

蓮華網観自在の図像と観想

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐久間, 留理子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003549

蓮華網観自在の図像と観想

佐久間 留理子*

I はじめに

慈悲の具現者である観自在菩薩は、西暦二世紀後半頃までに成立したとされる梵文『法華経』第二十四章「普門品」に説かれており¹⁾、これが最も古い典拠であると考えられている。観自在は観音や観世音の名称でも呼ばれるが²⁾、ここでは観自在の呼び名を用いることにする。「普門品」には、観自在が仏陀の姿や、ヴェーダ以来のヒンドゥー教の神々である、ブラフマー（梵天）、マヘーシュヴァラ（大自在天、シヴァ）などの様々な姿をとって教えを説くことが述べられている。

観自在の像は、西暦六、七世紀頃に開窟されたアジャンター、エローラなどの西インド石窟寺院にみることができる。それは、地面よりはえる蓮華の茎を左手に執り、右手の腕を屈して手のひらを前面に向けて、生類の恐れを除くしぐさ（施無畏印）を示すことが多い。また、右手の腕を下方へのばして手のひらを前面に向け、願いをかなえるしぐさ（与願印）を示すこともある³⁾。

このような基本的な姿の観自在がある一方で、複数の顔や手をもつ姿（多面多臂）やシヴァ等のヒンドゥー教の神々の特徴をもつ姿の観自在が信仰された。これらは近代の研究者の間で「変化観自在（変化観音）」と呼ばれている。日本・中国では、十一面観自在、不空羂索観自在、千手観自在というような変化観自在が良く知られているが、いずれも西暦七世紀初頭までには既にインドにおいて信仰されていたと推測されている⁴⁾。他方、八世紀以降のインド東部（ビハール、西ベンガル、バングラデシ

*（財）東方研究会

1) 梵文原典では第二十四章であるが [KERN and NANJIO 1909]、漢訳の鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』（『大正蔵経』no. 261）では第二十五章である。

2) 「観自在（アヴァローキテーシュヴァラ）」（Avalokiteśvara）は、ヒンドゥー教のシヴァの別名である「イーシュヴァラ」（īśvara）という語を含んでいることから、この神の影響を受けて作られた語であるとする説もある [岩本 1978: 209]。一方、「観音」の原語は「アヴァローキタ・スヴァラ」（Avalokitasvara）と推定されている [MIRONOV 1927: 251-252]。

3) 観自在が生類を救済するありさまを表わした、いわゆる諸難救済図に、その典型的な姿をみることができる [MALLMANN 1948: 135-141]。

4) 十一面観自在の経典の初訳は北周武帝の時代（A.D. 561-577）、また、不空羂索観自在の経典の初訳は北周禎明元年（A.D. 587）であることから、六世紀末までには、これらの変化観

ユ、オリッサ) には、これらとは異なる種類の変化観自在が少なからず知られている⁵⁾。

さて、チベット仏教においてはインドや日本・中国の仏教と同様に様々な種類の変化観自在が信仰されてきた。その中に、ここで取り上げる蓮華網 (Tib. Pad ma dra ba, Skt. Padmajāla) 観自在がある。この観自在は、初期密教の所作タントラと後期密教の無上ヨーガ・タントラとの両方に属しており⁶⁾、その古い作例 (十五世紀前半) ⁷⁾ の一つが、チベットのギャンツェにあるペンコルチューデの仏塔に残されている。

この仏塔に描かれた蓮華網観自在には十一面十二臂の姿⁸⁾ と四面八臂の姿⁹⁾ とがある。前者は両足を組んでおごそかに鎮座するが、後者はこれとは対照的に、左足で立って踊り、網のごとくに広げた両腕を上下に揺らしているかのようである。この動きに満ちた四面八臂の姿は、シヴァの舞踏王 (ナタラージャ) の姿を明らかに模しており、そのリズムカルなポーズは見るものを魅了する。しかし、この踊る姿以上にさらに印象的な特徴は、女神を抱擁する姿である。一般的に、観自在の姿では女神を抱擁

自在が成立していたと推測されている [後藤 1989: 134, 164]。千手観自在はインド本土 (西北インドのスワート地方を除く) には、現在のところその例をみないようである。しかし、唐の武徳年中 (A.D. 618-626) に中インドより入唐した婆羅門がその姿を描いたことが経典に知られており、七世紀初頭までにはインドにおいても既に信仰されていたものと推定されている [後藤 1989: 119]。

5) カサルパナ (空行) 世自在, ジャダクシャリー (六字), シンハナード (獅子孔) 世自在などがある [佐久間 1991, 1992, 1993]。

6) 根本タントラは『蓮華網と呼ばれる聖観自在の根本タントラ王』 (*Phags pa spyan ras gzigs dbaṅ phyug gi rtsa ba'i rgyud kyi rgyal po pad ma dra ba ses bya ba*) P no. 364, デルゲ版 no. 681, 翻訳者: Rin chen grub (Sumanahśrībhadra) であり, 所作タントラに属するとされる [Lo BUE 1993: 254]。そこには十一面四臂の姿が知られている (D fol. 246b1-6, P fol. 278b6-8)。ペンコル・チューデーの仏塔では、十一面の姿は、後述するように、主として所作タントラ、行タントラに属する諸尊が配置されている二階にある。

他方、『ブトッ全集』に収められた, *Thug rje chen po pad ma dra ba'i grubs thabs: thugs rje'i 'od zer 'byun ba zes bya ba* の名称をもつ成就法の奥付けでは、「蓮華網」は「無上ヨーガ・タントラの吉祥なる王」と呼ばれており、無上ヨーガ・タントラに属するものとみなされている。注14) 参照。また、蓮華網観自在の四面八臂の図像は、後述するように母系無上ヨーガ・タントラに属するマンダラが描かれた仏塔のハルミカー (平頭) の上層部 (七階) にある [Lo BUE 1993: 310-311]。さらに、『ギュデクントゥー』 (*rGyud sde kun btus*) に基づいたゴル (Nor) のマンダラ図像集では、蓮華網観自在の四面八臂の図像は bDe mchog spyān ras gzigs pa ma'i dra ba lha bži bcu ze lña'i dkyil 'khor (Cakrasamvara Avalokiteśvara Padmajāla Maṇḍala) の名称で収められており、母系無上ヨーガ・タントラに属するとみなされている [BSOD NAMS RGYA MTSO 1991: 160, 図版93]。

7) 仏塔に描かれた仏教パネオンの壁画は1442年迄に完成されたと考えられている [Lo BUE 1993: 31]。

8) 蓮華網観自在の十一面十二臂の図像はペンコル・チューデーの二階にあるシンハナード (獅子吼) 堂に描かれている [Tucci 1989c: fig. 213] [Lo BUE 1993: pl. 32]。二階部分は主として所作タントラ、行タントラに属する諸尊が配置されている [Lo BUE 1993: 49]。

9) [Lo BUE 1993: 310-311]。注 6) 参照。

することは避けられる。つまり、この図像には秘仏的性格があり、例外的な珍しい姿として注目される。女神を抱擁しない蓮華網観自在の十一面十二臂の姿が、主として初期密教の諸尊の配された仏塔の二階にあるのに対し、四面八臂の姿は、後期密教の秘仏的色彩の濃い諸尊の配された仏塔最上部近くの七階にあり、両者の間で扱いが異なっている。

ところで、チベット仏教の図像資料の中、『ギュデクントゥー』(*rGyud sde kun btus*)に基づいたゴル(Nor)のマンドラ図像集には、蓮華網観自在の四面八臂の姿が一例みとめられる¹⁰⁾。しかし、『五百尊図像集』や『三百尊図像集』等¹¹⁾には、蓮華網観自在の図像は収められていない。また、インド密教における成就法類の集成であり、密教図像を知る上で無視することのできない資料である『サーダナ・マーラー』(*Sādhanaṃālā*)には、十数種の観自在が知られているが、蓮華網観自在はその中に説かれていない¹²⁾。さらに、ネパール・カトマンズにある観自在の代表的な寺院、セト・マツェンドラナート(ジャナ・バハ)の「百八観自在」の図像にもみられない¹³⁾。このように、インド・ネパール・チベットにおいて蓮華網観自在の例をみることは少ない。

しかしその一方で、蓮華網観自在の姿を説く資料もわずかに知られており、その一つに『蓮華網生起成就法』(蓮華網の生起を観想する成就法)(北京版 no. 2622, デルゲ版 no. 1750, *Padma dra ba 'byuñ ba'i sgrub thabs*)がある¹⁴⁾。それはペンコルチュ

10) [BSOD NAMS RGYA MTSHO 1991: 160, 図版93]

11) 『五百尊図像集』[LOKESH CHANDRA 1987] [TACHIKAWA, MORI, YAMAGUCHI 1995], 『三百尊図像集』[LOKESH CHANDRA 1987] の他, 『八千頌般若挿図図像』[LOKESH CHANDRA 1987], 『蒙古版カンギョル挿図図像』[LOKESH CHANDRA 1987], 慈寧宮の宝相楼仏像群[CLARK 1965], 『諸尊諸菩薩聖像贊』[CLARK 1965] にも、蓮華網観自在の図像はみあたらない。

12) バッタチャルヤは、八本の梵文写本を用いて『サーダナ・マーラー』を校訂している[BHATTACHARYA 1968]。これには、カサルバナ(空行)世自在、シンハナーダ(獅子吼)世自在、シャダクシャリー(六字)世自在、ヴァジュラダルマ(金剛法)等の成就法が収められているが、蓮華網観自在の成就法はない。また、バッタチャルヤが校訂に用いなかった『サーダナ・マーラー』の梵文写本には、東大写本[MATSUNAMI 1965: nos. 451-454], 京大写本[NOGUCHI, GOSHIMA 1983; nos. 117-121], ネパール国立考古局内文書局所蔵写本[SĀHITYAŚĀSTRĪ 1967 nos. 3-387, 3-324, 3-603], ネパール仏教写本マイクロフィルム・カタログに記載の写本[高岡 1981: nos. KA30, CA26, DH 201]があるが、これらにも蓮華網観自在の成就法はみあたらない。

13) [LOKESH CHANDRA 1981] [高岡 1982] [ガウタマ 1990] [高岡 1990]に掲載された「百八観自在」の図像にはみられない。また、ネワール仏教には、『百八観自在名経』を唱える伝統があり、百八の観自在の名称も紹介されているが[LOKESH CHANDRA 1986: 39-42], それらの中に蓮華網観自在の名は知られていない。

14) この成就法は、奥付けによれば、ゲルワベルイエーシェー(*rGyal ba dpal ye šes*)(Skt. Jayaśrījñāna)の作と述べられている。この人物は『蓮華網観自在の次第による世尊マンドラに供養する儀軌』(*Padma sbyan ras gzigs dba'i phyug gi padma dra ba'i rim pas bcom ldan 'das*)

デの仏塔にある、女神を抱擁する四面八臂の図像と概ね同様の姿を説いている。本稿では、これらの両者を資料として蓮華網観自在の図像を考察したい。

II 『蓮華網生成就法』にみる観自在の図像とその特色

『蓮華網生成就法』の中尊である観自在の姿は「第一のヨーガと呼ばれる三昧」(dañ po sbyor ba zes bya ba'i tiñ ne 'dzin) の部分に説かれ、また、本尊を取り巻く女神や門衛の姿は「最勝王の三昧」(rgyal po mchog gi tiñ ne 'dzin) の部分に説かれている。これらの三昧は、ヨーガ・タントラや無上ヨーガ・タントラの実践法にみられる「三三昧」(trisamādhi) と呼ばれる三段階の観想方法の第一と第二に相当する¹⁵⁾。

さて、ここでは「第一のヨーガと呼ばれる三昧」の記述に従い、本尊の図像的特徴について述べよう¹⁶⁾。

\\dkyil 'khor du mchod pa'i cho ga) P no. 2622, デルゲ版 no. 1751) の作者でもある。一方、『ブトッ全集』には、*Thug rje chen po pad ma dra ba'i grubs thabs: thugs rje'i 'od zer 'byun ba zes bya ba* の名称をもつ成就法が収められている [LOKESH CHANDRA 1967]。この成就法の奥付けは、無上ヨーガ・タントラの吉祥なる王、蓮華網と呼ばれるものによってゲルワベルイエシュエがお作りになった成就法に従い、比丘リンチェンドゥブ (Rin chen grub) が著したと述べており、そのオリジナルの成就法が今回取り上げる『蓮華網生成就法』であることを示している。トゥッチは、この『ブトッ全集』の成就法に述べられた蓮華網観自在の姿を、ペンコルチャーデの仏塔の蓮華網観自在の図像の解説として紹介している [TUCCI 1989a: 299]。しかし、このトゥッチの引用した成就法は、今回取り上げる成就法に比べると、図像に関する象徴的意味の説明が削除され、簡略化されている。本稿では、オリジナルの成就法の記述に従ってその図像を考察する。

15) 前者の三昧は三三昧の中の第一に相当し、梵語では「アーディヨーガ・サマーディ」(ādiyoga-samādhi) と呼ばれる。また、後者の三昧は、三三昧の中の第二に相当し、「マンダラ・ラージャ・グリー・サマーディ」(maṇḍalarājāgri-samādhi)、もしくは、「マンダラ・パラマラージャ・サマーディ」(maṇḍala-paramarāja-samādhi) と呼ばれる。ツォンカパの著した『ガリムチェンポ』(sNags rim chen po) は、ヨーガ・タントラの道次第の中に三三昧（最初の加行の三昧、最勝のマンダラの三昧、最勝の事業の三昧）を修習する広、中、略の方法があることを説いている [高田 1978: 395]。また、三三昧は、アーナンダガルバ作『金剛界大マンダラ儀軌一切金剛出現』(Vajradhātumahā-maṇḍalopāyikā-Sarvavajrodaya) [密教聖典研究会 1986: 224-257] や聖父子流の基本経典の一つである『ビンディークリタ・サードナ』(Piṇḍikṛtasādhana) [羽田野 107-165] [酒井 1956: 47-99] にも知られている。

16) 図像の諸特徴とそれらの象徴的意味を述べた箇所の手紙文を、北京版 (P)、デルゲ版 (D) に基づいて以下に示した。(P no. 2622, fols. 157b5-168a3, D no. 1750. fols. 135a4-144a4) ye šes lña'i rañ bzin hrñh'i'1 yi ge'i sa bon yon su gyur pa² las³ bdag ran⁴ ñid dpal padma spyar ras gzig kyi dbañ phyug thub pa'i mchog rdul phra rab kyi lus tshad med pa dan/ bsdu⁵ ba'i dños po dan skad cig dan dga' ba bzi rnam par dag pa yañ dag par bsal bar byed pa'i žal bzi par blta bar bya'o// 'gro ba tshim par byed pa po ñid kyi phyir rtsa ba'i žal dan lus gañ ba'i zla ba ltar dkar ba/⁶ g'yas pa dan⁷ rgyab dan g'yon pa'i žal sñon po dan dmar po dan ljañ gu'o// snags dan bdag dan lha'i de ñid gsum gsal bar byed pa po ñid kyi phyir spyar gsum rnam par thar pa brgyad kyi tshul gyi phyir phyag brgyad do// stoñ pa ñid dan sñin rje chen po dag mñam pa'i bdag ñid can gyi dños po phyir dan (A) šes rab dan thabs kyi bdag ñid dam pa'i sku gsal bar byed pa po ñid kyi phyir rnam pa gñis sgron mas kun tu snañ bar⁸ byed pa ltar ran snañ⁹ gi rig ma gos dkar mo g'yon gyi phañ du phyag kyis 'khyud de 'dzin pa'o// (B) ^{(10)-srid} /

本尊の姿は四面八臂で、白衣明妃を左膝に抱き上げた姿であり、半跏坐である。四面の中、中央の面は白く、右と後ろと左の面は、各々、青、赤、緑であり、三眼をつける。また、頭は無量壽の冠（阿弥陀の化仏）を頂き、白い蓮華で印づけられ、編んだ髪は知恵の半月を付ける。さらに、第一の右手は五鈷の金剛杵を持ち、それで左の第一臂にある蓮華を開ける仕草をしている。この他の臂については、第何臂が明確に述べられてはいないが、おそらく第一臂に続く第二臂の右手と左手、第三臂の右手と左手等の順に説かれていると考えられる。第二臂以下の持物は、順に、鉤と羂索、知恵の甘露に満たされたカパーラ（頭蓋骨の杯）と人頭、白いカトゥヴァーンガ（觸髻杖）と宝珠である。一方、本尊の抱く明妃は、本尊と同様の姿か、もしくは、二臂で

pa'i 'chîn pa las grol ba'i phyir dan/⁻¹⁰⁾ tin ñe 'dzin rnam par 'chad¹¹ pa yän dag par bsrün ba'i
phyir skyil kruñ¹² phyed pa'o// (C) gzugs la sogs pa'i phuñ po lña rnam¹³ par¹⁴ dag par rañ bzin
gyi phyir dan/ me lon la sogs pa'i yes šes lña rnam par dag pa'i phyir g'yas pa'i phyag dan por
gnas pa'i rtse mo lña ba'i rdo rjes g'yon gyi phyag dan por gnas pa'i ⁽¹⁵⁾-padma 'byed
bzin⁻¹⁵ pa'o//

ji ltar padma dmar po ni// gnas kyi ñes pas mi gos pa//
de bzin grub pa'i rnal 'byor ldan// gnas ñes¹⁶ sna tshogs kyi kyan ño//
de phyir padma žes brjod do//

(D) gdul dka¹⁷ ba 'gags¹⁸ par byed pa'i phyir padma'i lcags kyu gdeñs pa'o// gdul bya ma¹⁹ yin pa
'chîn par byed pa ñid kyi phyir padma'i žags pas mtshan ma'i phyag go// (E) don dam pa las
chos thams cad bdag med pa'o// žes gsal bar byed pa'i phyir ye šes kyi bdud rtsis gañ ba'i thod
pa phyag tu'o// skye mched drug la sogs pa'i lus 'jog pa spañs pa'i phyir ro//mgo bo la sogs
pa rkañ pa'i mthar thug pa'i rnam par dpyad pa las/²⁰ stoñ pa ñid du²¹ ro gcig cîn dbye ba med
pa'i mgo bo'o// g'yo ba med pa'i dños po'i phyir dag pa'i šel²² dan// duñ dan kunda dan zla
ba ltar dkar ba'i kha tvāmga bsnams pa dam pa'i chos kyi ⁽²³⁾sbyin pa po ñid kyi⁻²³ phyir
phyag tu rin po che'o// (F) spros ba med pa'i šes rab kyi bdag ñid dan bcas pa ñid kyi lha
mo'i nu ma la reg cîn dga' ba'o// sdug bñal gsum gyis gzir ba'i 'gro ba la so sor rtog pa'i
mchog ñid kyid phyir 'od dpag med kyi cod pan can no// bcud len yonñ su rdzogs pa'i phyir
dan ye šes kyi zla ba'i cha'i myu gu can gyi ral pa'i tshogs kyi brgyan pa de kho na ñid kyi cha
šas bsdus par byas pa rnam par 'joms pa po ma yin pa ñid kyi phyir padma dkar pos dbu la
mtshan pa'o//
de bzin du/²⁴

sems can rjes su 'dzin pa'i//²⁵ thugs rjes rjes chags²⁶ yañ dag byuñ//
yañ dag rdzogs pa'i dge chos kyi// ñion moñs thams cad ñes 'dul byed//
kun gyis brgyan pa'i gzugs rnam kyi// ži dan sgeg pa 'chañ ba'o//
šes rab thabs bdag dam pa'i sku// mtshan mor byed pa mchog 'bar byed//²⁷
ces pa²⁸ dan/²⁹ gžan yañ/

bcom ldan 'das ma 'añ thams cad du// bcom ldan 'das mtshuñs³⁰ bsam bar bya'o³¹ žes so//
yañ na phyag gñis padma dmar po rnam pa rgyas par byed bzin pa'o// de bzin du/³²
sna tshogs sprul pa'i rnam g'yeñ gis/ ma lus 'gro don bya de mchog/
bcom ldan 'das gzugs bdag ñid ni// bsams nas bsgom par³³ brtsam par bya//
žes³⁴ de lta bu ni dan po sbyor ba žes bya ba'i tin ñe 'dzin rañ gi don sgrub byed do//

以下に異読を記す。

1 P gi, 2 P pas, 3 P om., 4 P om., 5 P bsdu, 6 P om., 7 P ins., 8 D mes, 9 P not clear, 10 P not clear, 11 P cad, 12 P not clear, 13 P not clear, 14 P not clear, 15 P padma'i byed bzin, 16 D žes, 17 P dga', 18 P 'phyags?, 19 P la, 20 P //, 21 D om., 22 D šes, 23 D om., 24 P om., 25 P pa'o//, 26 P chugs, 27 P om., 28 P om., 29 P //, 30 P mtshu du, 31 P bya, 32 om., 33 P pa, 34 P ins. pa

赤い蓮華を開ける姿であると説かれている。

本尊の姿は以上のごとくであるが、この観自在の図像的特徴を他の種類の観自在や他の尊格のものとも比較して、その図像的特色について考察したい。

まず、この観自在の図像は、金剛法（ヴァジュラダルマ）のごとく蓮華を開く姿を基本としている。金剛法は、『初会金剛頂経』では十六大菩薩の一つであり¹⁷⁾、観自在を母体として作られたものと考えられている。それは、大いなる悟りを本質とし、本質的に清浄であるとされる。また、その姿は『サーダナ・マーラー』の金剛法成就法（バッタチャルヤ校訂本 no. 10）や不空訳『無量壽如来観行供養儀軌』¹⁸⁾にも知られている。蓮華を開く姿の観自在は「金剛法」の名称で呼ばれる他、単に「聖観自在」、「世自在」という観自在の一般的名称でも呼ばれることがある。しかし、「金剛法」以外の固有の名称は知られていないので¹⁹⁾、蓮華を開くしぐさをする観自在は、金剛法タイプとみなすことができる。このように、蓮華を開くしぐさをする蓮華網観自在は、金剛法タイプの観自在と関連があると言うことができよう。

なお、蓮華網観自在のごとくに五鈷の金剛杵を持って蓮華を開く姿は、金剛法タイプの観自在の姿にはみられず、五鈷杵は蓮華網観自在に特徴的な持物であると思われる。蓮華網生起成就法は、五鈷の金剛杵を持って蓮華を開く姿について次のように述べている。

「色等の五蘊があまねく清浄であるという自性の故に、また、鏡等の五智（大円鏡智、法界大性智、平等性智、妙観察智、成所作智）がすべて清浄であるが故に、第一の右手にある五鈷の金剛杵によって、左の第一臂にある蓮華を開けるのごとくである。

赤い蓮華が場所（泥地）の汚れによって染まらないように、そのように成就し

17) 梵文では金剛法の姿は[堀内 1983: 57]に説かれている。漢訳では、不空訳『金剛頂一切如来真実撰大乘現證大教王経』（「大正蔵」no. 865, vol. 18, p. 221b）、金剛智訳『金剛頂瑜伽中略出念誦経』（「大正蔵」no. 866, vol. 18, p. 231a）、施護等訳『仏説一切如来真実撰大乘現證三昧大教王経』（「大正蔵」no. 882, vol. 18, p. 346a）に説かれている。

18) 「大正蔵」no. 930, vol. 19, p. 71a に金剛法の姿が説かれている。

19) 蓮華の花弁を開く姿の観自在には、金剛法の他に、ラクタ（赤）世自在があるとする説がある。例えば、バッタチャルヤは、*The Indian Buddhist Iconography* において、蓮華の花弁を開く姿の金剛法を紹介する一方で、ラクタ世自在にも、二臂で蓮華の花弁を開く姿があると述べている [BHATTACHARYA 1968b: 142-143, 138-139]。しかし、後者の姿の典拠となっている『サーダナ・マーラー』の no. 38 の『世自在の敬愛儀軌』には、「ラクタ世自在」という名称は説かれていない。ここには本尊が赤い色をしていると述べられているだけである。従って、これを「ラクタ世自在」という固有の名称で分類すべきではないと考える。この儀軌に説かれているごとく、単なる「世自在」あるいは「聖観自在」とみなすべきであろう。このように、観自在の様々な姿の中には、蓮華の花弁を開く姿があり、それは「金剛法」と呼ばれる他、「聖観自在」、「世自在」とも呼ばれるが、「金剛法」以外に固有の名称は知られていない。

たヨーガをもつものは、様々な場所の汚れによってもまた「染まらないの」である。それ故に蓮華と言われる。」²⁰⁾

この解説によれば、蓮華は成就したヨーガをもつものの清浄性の象徴であり、右手にある五鈷の金剛杵によって左の第一臂にある蓮華を開ける姿は、五蘊と五智の清浄性を表すと考えられている。以上のごとく、蓮華網観自在の姿は、本質的に清浄であるとされる金剛法タイプの観自在を基本としていると考えられる。

第二に、蓮華網観自在の姿は、三眼、半月、カトゥヴァーンガ（髑髏杖）、カパーラ（頭蓋骨の杯）という特徴にみられるごとく、ヒンドゥーのシヴァ神的要素をもつ。これらの特徴は、ヴェーダの宗教において必ずしもシヴァ（ルドラ）の特徴ではなかったようであるが、ヒンドゥー教においてはシヴァの一般的特徴としてみとめられていたものである²¹⁾。こうした仏教にとっての外教の神の特徴は、仏教的教義づけを新たに行うことにより、観自在の特徴として取り入れられる。例えば、蓮華網生起成就法は、次のように述べている。

「『最高の真実からすれば一切の法は無自性である』ということを明らかにするが故に、知恵の甘露によって満たされたカパーラを手「持つ。それは」六処等の身体の執着を捨てるが故にである。」²²⁾

上述のように、蓮華網観自在の姿は、シヴァ神の特徴を排除するのではなく自らの中に友好的に取り入れ、仏教的な教義づけを行う機能をもっている。言い換えれば、それはヒンドゥー教の神々との摩擦を緩衝する役割を果たしているともみることができる。

第三に、この観自在は羂索に象徴される不動尊のごとき護法尊的要素をもつ。羂索は古くはヴェーダの宗教において宇宙の理法を司るヴァルナ神の持物であり、偽善者を縛り上げる道具として知られる²³⁾。この恐ろしい懲罰の道具の羂索は、密教においては不動尊が悪魔（ヒンドゥーの神々や煩惱）を捕縛する持物として取り入れられたが²⁴⁾、それは同時に教化しがたき生類をも救済するという仏教的な慈悲の象徴でもあり、四摂方便を表すとされる²⁵⁾。観自在の特徴としては、不空羂索観自在の代表的持

20) これは、上述のチベット文における（C）以下の下線部に説かれている

21) これらの特徴は、例えば、『マハーパーラタ』XII. 160, 44-47; XIII. 14, 119; XIII. 127, 18, 14; XIII. 128, 14 に述べられている。

22) これは、上述のチベット文における（E）以下の下線部に説かれている。

23) 例えば、『アタルヴァ・ヴェーダ・サンヒター』IV, 16, 6 に説かれている。

24) 不動尊の羂索の使用法は『サーダナ・マラー』のチャンダマハーロジャナ成就法に説かれている [BHATTACHARYA 1962: 175] [頼富・下泉 1994: 162-163]。

25) 不動尊の羂索と四摂方便の関係は『大毘盧遮那成仏経疏』巻第五「大正蔵」no. 1796, vol. 2, p. 633b に説かれている。

物であり、唐・菩提流志訳『不空羼索神變神言經』にも説かれている²⁶⁾。一方、蓮華網生成成就法には、次のごとくに述べられている。

「調伏しがたいものをとどめるが故に蓮華の鉤を持ち上げるのである。教化されていないものを縛るが故に、蓮華の羼索を手に持つ。」²⁷⁾

このように、羼索は鉤と一対となった生類救済の道具と考えられている。

第四に、蓮華網観自在は明妃を抱いた姿をしており、シャクティズム（女神崇拜）の要素がみられる。成就法には、次のごとくに説かれている。

「知恵と方便の最上の身体を明らかにするものであるが故に、姿は二つ（明妃と本尊）であり、燈明によってすべてを照らすごとくに、[本尊は] 自らの現れの白衣明妃を左膝に抱き上げる。」²⁸⁾

「[本尊は] 戯論の無い知恵の自性をもつことによって、女神の乳房に触れて喜ぶ。」²⁹⁾

上述のように、明妃（女神）は、本尊の分身であるとともに、知恵の反映でもあり、方便を表す本尊と表裏一体の関係にある。また、この白衣明妃を中心とする女神たちは、本尊の観想される「第一のヨーガと呼ばれる三昧」に続く「最勝王の三昧」において活性化する。即ち、後者の三昧では、本尊を取り巻く女神たちが踊りを舞い歌を歌うことが観想される³⁰⁾。歌詞には、「オーム、仏陀である汝よ、金剛手である汝よ、

26) 「大正蔵」no. 1092, vol. 20, p. 265b, 266c.

27) これは、上述のチベット文における (D) 以下の下線部に説かれている。

28) これは、上述のチベット文における (A) 以下の下線部に説かれている。

29) これは、上述のチベット文における (F) 以下の下線部に説かれている。

30) 女神たちが踊りを舞い歌を歌うことは P fols. 162b6-163a3, D fols. 139a6-139b2 に説かれている。女神たちの名称とマンドラでの配置は次の通りである。[] カッコ内は梵語である。

第一の蓮華の八弁の女神

- 1 ベーマ・チェンマ, Padma spyen ma [Padmalocanā] (東), 2 リンチェン・ベーマ, Rin chen padma [Padmaratna] (南), 3 ベーマ・ドルジェー, Padma rdo rje (D Padma rdo rje can) [Padmavajrī] (西), 4 ベーマ・ドルマ, Padma sgrol ma (P pad sgrol) [Padmatārā] (北)
- 5 ベーマ・ゴマ, Padma gos ma [Padmavāṇī] (東南), 6 ベーマ・バルマ, Padma 'bar ma [Padmajvālā] (西南), 7 ベーマ・ゴンモイトーニエルチェン Padma snon mo'i khro gñer can [Padmanīlabhrkuṭī] (北西), 8 ベーマ・ツェモ, Padma rtse mo [Padmaśikharā] (北東)。

第二の蓮華の十二弁の女神

- 1 ベーマ・カルダ, Padma skar mda' [Padmamolkā], 2 ベーマ・ギュマ, Padma sgyu ma [Padmamāyā], 3 ベーマ・ドゥーペワンチュクマ, Padma 'dod pa'i dbaṅ phyug ma [Padmakāmeśvarī], 4 ベーマ・デンマ, Padma ldan ma [Padmavatī], 5 ベーマ・ツンマ, Padma mtshuṅs ma 6 ベーマ・トゥンポイワンチュクマ, Padma gtum po'i dbaṅ phyug ma [Padmacandeśvarī], 7 ベーマ・サンマ, Padma gsaṅ ma [Padmaguhyā], 8 ベーマ・チェンモ, Padma chen mo [Mahāpadmā], 9 ベーマ・ダワマ, Padma zla ba ma [Padmacandrā], 10 ベーマ・ナンマ, Padma snān ma [Padmābhā], 11 ベーマ・ガウリーム, Padma gau rīm (P Padma go rīm) [Padmagaurī], 12 ベーマ・ゾウマ, Padma mdzod ma [Padmakōśā]。

第三の蓮華の十六弁の女神

- 1 ベーマ・ワンチュク, Padma dbaṅ phyug [Padmeśvarī], 2 ベーマ・ドンマ, Padma'i /

ブラフマーとヴィシュヌとシヴァである汝よ、月、太陽である汝よ、アラララホー、パドマジャーラ、シュリーヒ」と歌われている³¹⁾。この中の「アラララホー」という歌詞は、『サーダナ・マラー』の六字世自在成就法³²⁾やマハーマヤー成就法³³⁾における、女神を奮起させるための真言や歌の中にもほぼ同じ文句として知られている。こうして、蓮華網生起成就法では、女神たちが観自在を取り巻くマンダラ全体を活性化させるのに重要な役割を果たすのである。観自在の抱く明妃は、知恵の象徴であると同時に、これらの女神たちの活動力の象徴でもあるとみなすことができよう。

以上述べてきたごとく、蓮華網観自在の姿は、金剛法タイプの観自在を基本としているが、その姿にはさらに、シヴァ神的要素、護法尊的要素、シャクティズムの要素がみられる。これらの要素を重層的にもつ点に、蓮華網観自在の図像的特色があらわれていると考えられる。

III ペンコル・チューデの仏塔にみられる蓮華網観自在の図像

蓮華網観自在の図像は、仏塔のハルミカー（平頭）の上層部（七階）の東面（北面寄り）に描かれている（写真1-4、図125）³⁴⁾。この階には、母系無上ヨーガ・タント

\\gdon ma [Padmamukhā], 3 ベーマ・トゥンマ, Padma gtum ma [Padmacandā], 4 ベーマ・リクパチョクマ, Padma rig pa mchog ma [Padmavidyottamā], 5 ベーマ・ギャンツォマ, Padma rgya mtsho ma [Padmasāgarā], 6 ベーマ・ナンチェーマ, Padma snan byed ma [Padmaprabhākari], 7 ベーマ・イーシンノルブマ, Padma yid bzin nor bu ma [Padmacintāma], 8 ベーマ・ドゥーマ, Padma 'dod ma [Padmakāmā], 9 ベーマ・ドーマ, Padma 'gro ma [Padmagāmanā], 10 ベーマ・ヤンマ, Padma dbyaṅs ma (D om.) [Padmaghoṣā], 11 ベーマ・リモ, Padma ri mo (D om.) [Padmalekhā], 12 ベーマ・ナクモ, Padma nag mo [Padmakālī], 13 ベーマ・デマ, Padma bde ma [Padmasukhā], 14 ベーマ・チェンマ, Padma spyān ma (D Padma can ma) [Padmalocanā], 15 ベーマ・ゴンメーテルマ, Padma snon ma'i gter ma [Padmanilanidhi], 16 ベーマ・ネンジョルワンチュクマ, Padma rnal 'byor dbaṅ phyug ma [Padmayogeśvari]

なお、これらの女神の他に次の諸尊もいる。

門衛

1 ベーマ・チャクキュ, Padma lcags kyu [Padmāṅkuśa] (東), 2 ベーマ・シャクパ, Padma žags pa [Padmapāśa] (南), 3 ベーマ・チャクドク, Padma lcags sgrogs [Padmasphoṭā] (西), 4 ベーマ・ベッパ, Padma 'bebs pa [Padmāveśa] (北)。

四隅のダーキニー

1 ロランマ, Ro laṅs ma [Vetālī], 2 ダグボイダデンマ, Drag pōi sgra ldan ma [Ghoraghoṣā], 3 ドルジェーチェ (ワ) マ, rDo rje mche (ba) ma [Vajradamṣṭrā], 4 トップチェンマ, sTobs chen ma (P sTob chen ma) [Mahābalā]

31) チベット文は、次の通り。om saṅs rgyas khyod// rdo rje 'dzin pa khyod// tshaṅs pa dan khyab 'jug dan dbaṅ phyug chen po khyod// zla ba ṅi ma khyod// a la la la ho padma dza la śrīḥ zēs glu blaṅ/

32) [BHATTACHARYA 1968a: 27] [佐久間 1996a: 88]

33) [BHATTACHARYA 1968a: 460] [森 1993b: 30]

34) [Lo BUE 1993: 310-311]



写真1 蓮華網観自在の姿

ラに属する諸尊とそのマンダラが全部で十一種類ある。壁画における本尊とそれを取りまく女神たち、門衛等の配置は図1の通りである。但し、ここでは写真資料の制約から、女神、門衛等の名称を部分的にしか比定できなかった³⁵⁾。図2は、壁画における写真1-4、図125の画面の範囲を示したものである。

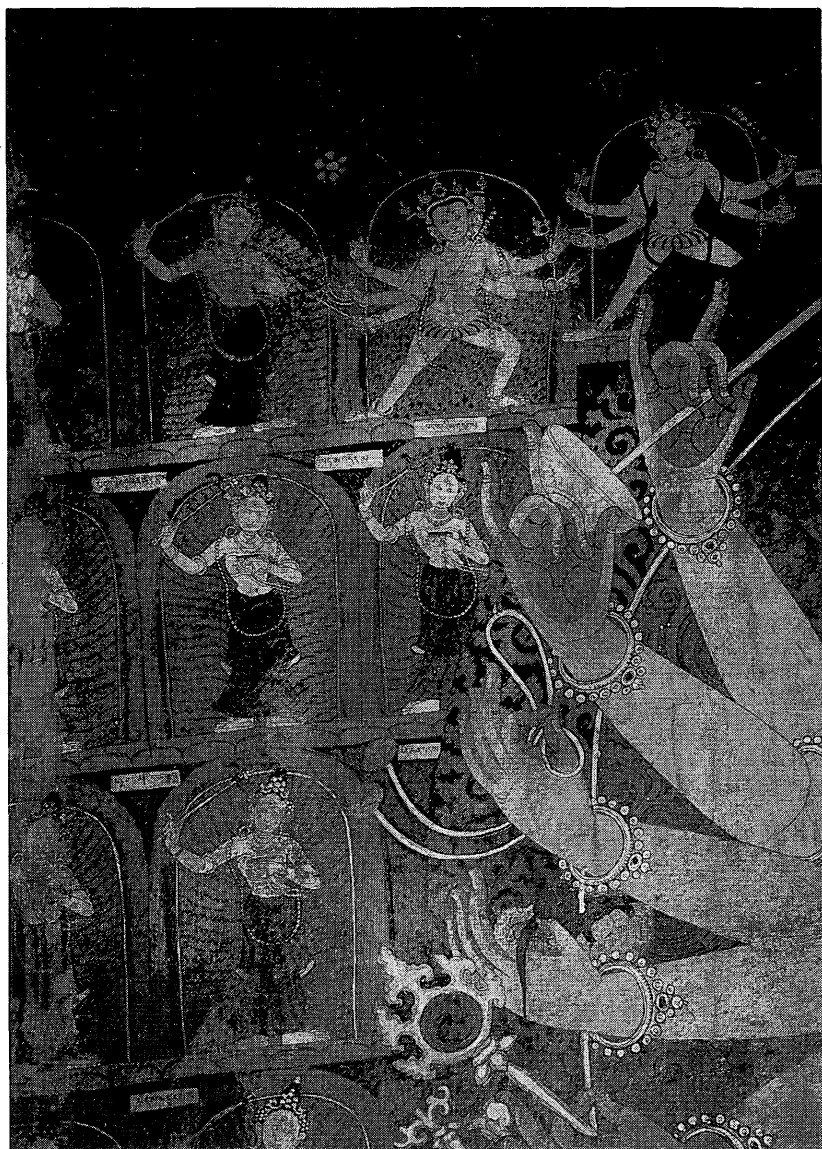


写真2 蓮華網観自在の右手（上方）とその周辺

まず、本尊の姿についてみてみよう。本尊は四面八臂で、右足を左の腿にあてて左足で立つ。小さな阿弥陀の化仏を頭頂に付けている。中央の面は白色で、中央の面から右回りに、青色、赤色、緑色の面をもつ³⁶⁾。各々の面には三眼がある。中央の二臂の中、右手は五鈷の金剛杵を持ち、左手に持つ赤い蓮華の花弁を開くしぐさをしてい



写真3 蓮華網観自在の右手（下方）とその周辺

る。次に、残りの臂について下から順に述べると、第二臂は、右手で鉤を、左手に羂索を持ち、第三臂は、右手にカパーラを、左手に人頭を持つ。第四臂は、右手でカトゥヴァーンガ、左手で火炎をあげる宝珠を先端に付けた棒を持つ。身体の色は、肌色がかった白色である。



写真4 蓮華網観自在の左手とその周辺

一方、妃は、三面四臂で、左足を上げて右足で立つ。本尊と向き合った顔は薄い褐色であり、残りの二面の中、上は緑色、下は赤色である。各々の顔には三眼がある。本尊を抱いた二臂の中、右手は五鈷の金剛杵を、左手は赤い蓮華を持つ。これらの臂から順に下へと説明すると、第二臂は、右手で鉤を、左手で羂索をもち、第三臂は、

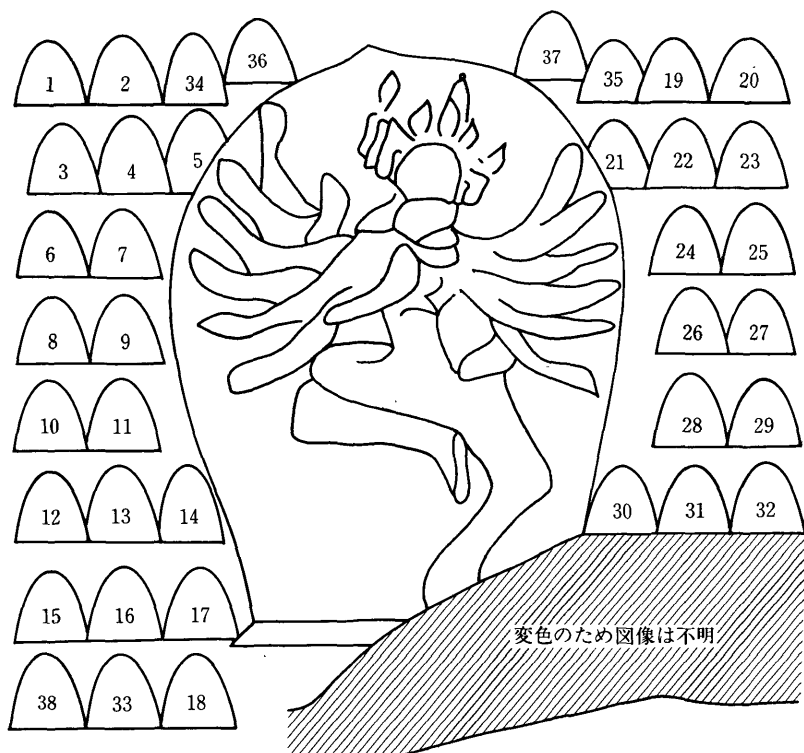


図1 (女神・門衛・ダーキニーの配置)

右手にカパーラを、左手に人頭を持つ。第四臂は、右手にカトゥヴァーンガを、左手に火炎をあげる宝珠を先端に付けた棒を持つ。身体の色は、薄い褐色である。

以上の図像を蓮華網生起成就法に説かれたものと比較すると、本尊の面数臂数、左右の臂の持物³⁷⁾、身体の色、阿弥陀（無量壽）の化仏を付ける点、三眼を顔につける点と同様である。また、面の色は中央が白色で、右回りに青色、赤色、緑色である点

35) 撮影を行った正木先生によれば、特に壁画の向かって右側は、後方に壁面がせまっており、撮影が困難であるという。なお、女神はすべて同じ姿をしており、名称の比定に際しては、壁面に書かれた銘文を読まなければならない。しかし、資料写真には、ぼやけて必ずしも読みとれない部分がある。この状況は、門衛の場合についても同じである。以上のような事情から、女神などの名称の比定は残念ながら不完全なものとなった。

36) 青色と赤色の面は、中央の面の向かって左側、緑色の面は、中央の面の向かって右側である。

37) 成就法には、第一臂以外の臂について、第何臂か明確に述べてはいないが、おそらく第一臂に続く第二臂の右手と左手、第三臂の右手と左手等の順に説かれていると考えられる。この順番に対応する臂（第二臂以下）は、壁画の観自在の場合では、最下から上へと順に描かれている。なお、成就法に説かれた宝珠は、壁画では火炎をあげる宝珠を先端に付けた棒となっている。これは、明妃の場合も同じである。

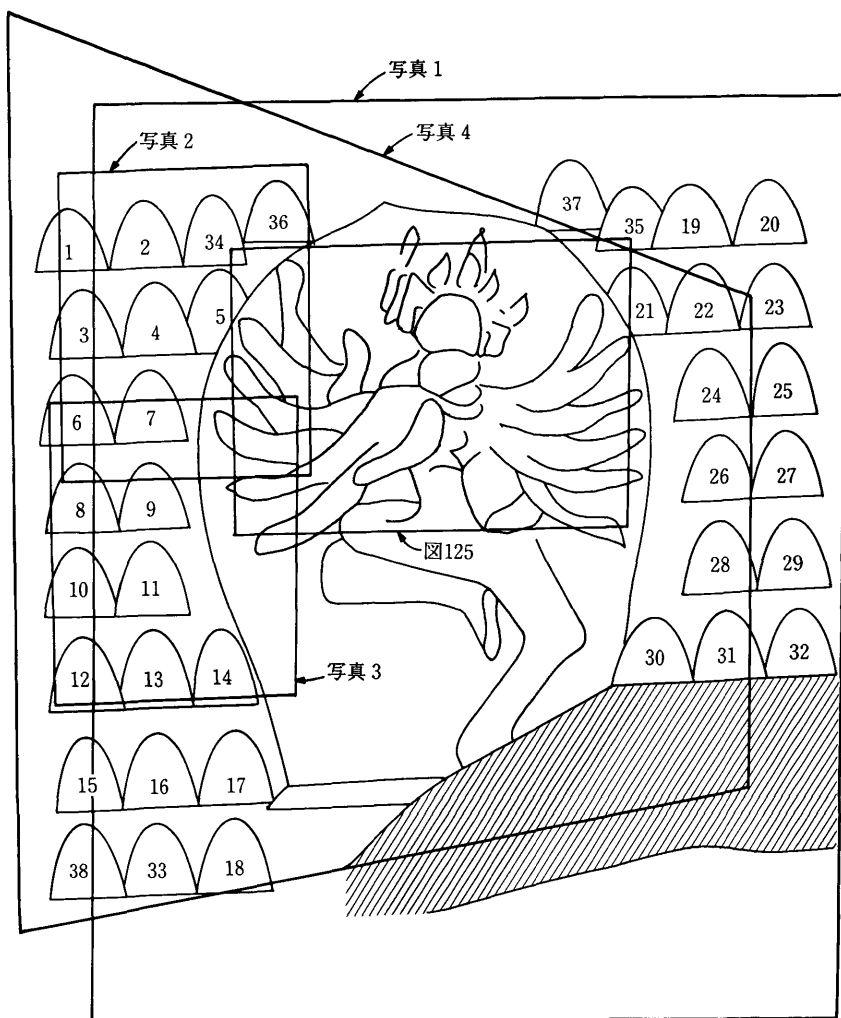


図2 (女神・門衛・ダーキニーの配置と写真の範囲)

も一致する。脚勢については、成就法は半跏坐と説いている³⁸⁾。半跏坐は、左右いずれか片方の足を股の上に安じて、もう一方の足を股の下に入れる坐勢とする説があるが³⁹⁾、他方、片足で立ち、もう一方の足をあげて踊る脚勢とする説もある⁴⁰⁾。半跏坐を後者のものとして解すれば、成就法に述べられた脚勢は、壁画のものと一致する。

38) 成就法は、「輪廻の束縛より解脱しているが故に、また、三昧を途中でやめることを保つが故に、半跏坐である」と説いている(上述のチベット文における(B)以下の下線部)。

39) [逸見 1935: 165-167]

40) [LIEBERT 1986: 22]

女神・門衛・ダーキニーの配置（番号は図1，2の配置番号に一致する。……は名称が不明であることを示す。）

女神（一面二臂）

- 1 ベーマ・イーンシノルブマ (Padma dyid bzin nor bu ma) (成就法では本尊を取りまく第三重の蓮華の第七の花弁に位置する。以下同様に蓮華の花弁の位置を記す。)
- 2 ベーマ・ドゥーマ (Padma 'dod ma) (第三蓮華の第八花弁)
- 3 ベーマ・トゥモイワンチュクマ (Padma gtum po'i dbaŋ phyug ma) (第二蓮華の第六花弁)
- 4 ……
- 5 リンチェン・ベーマ (Rin chen padma) (第一蓮華の第二花弁)
- 6 ……ツォマ (……tsho ma)
- 7 ベーマ・ツンマ (Padma mtshuŋs ma) (第二蓮華の第五花弁)
- 8 ベーマ・リクチュクマ (Padma rigs chog ma) (第三蓮華の第四花弁)
- 9 ベーマ・デンマ (Padma 'dan ma) (第二蓮華の第四花弁)
- 10 ベーマ・トゥンマ (Padma gtum ma) (第三蓮華の第三花弁)
- 11 ベーマ・ドゥーペワンチュクマ (Padma 'dod pa'i dbaŋ phyug ma) (第二蓮華の第三花弁)
- 12 ……
- 13 ……
- 14 ……
- 15 ……
- 16 ……
- 17 ベーマ・チェンマ (Padma can ma) (第三蓮華の第十四花弁)
- 18 ベーマ・ツェモ (Padma rtse mo) (第一蓮華の第八花弁)
- 19 ……
- 20 ……
- 21 ……
- 22 ……
- 23 ……
- 24 ベーマ・ツェンモ (Padma mtshan mo)
- 25 ……
- 26 ベーマ・ダワマ (Padma zla ba ma) (第二蓮華の第九花弁)
- 27 ……
- 28 ベーマ・ナンマ (Padma snaŋ ma) (第二蓮華の第十花弁)
- 29 ……
- 30 ……
- 31 ……
- 32 ……

残り四尊は欠損

門衛（三面六臂）

- 33 ベーマイ・チャクキュ (Padma'i lcags kyu)
- 34 ベーマイ・ジャクパ (Padma'i žags pa)
- 35 ……

残り一尊は欠損

ダーキニー（一面四臂）

- 36 ダクボイダタンデンパ (Drags po'i gra daŋ ldan pa)
- 37 ドルジェーチェワマ (rDo rje mche ba ma)
- 38 ……

残り一尊は欠損

一方、明妃についてみると、成就法は明妃が本尊と同じ姿の場合（四面八臂）と、二臂の場合があると説いている。壁画の姿では、本尊と臂数、持物が同じに描かれている⁴¹⁾。面に三眼がある点も同様である。但し、面数が、壁画の場合は三面となっており、成就法に説かれた四面とは異なっている。

このように、蓮華網生起成就法に説かれた観自在の姿は、ペンコル・チューデの仏塔の壁面に描かれた観自在の姿と概ね一致する。

次に、本尊のまわりの諸尊についても説明しておこう。図1にみられるごとく、本尊の向かって左側には二十二尊があり、右側には十六尊ある。壁画の右下部分に変色のため図像や銘文がみえない。右側にも左側と同数の諸尊が描かれていたものとすれば、本尊以外の諸尊の数は全部で四十四尊となり、蓮華網生起成就法のマンダラの諸尊の数と一致する。これらの諸尊の中、図1の右表に示したごとく、十八の諸尊の名称を確認することができた。これらの名称は、一つを除いて⁴²⁾、蓮華網生起成就法に見いだすことができる。

まず、女神たちの姿についてみてみよう。1-32までの女神はすべて一面二臂であり、三眼を付け、右手に鉤を持ち、左手で羂索とカパーラを持つ。一方、成就法には、本尊を取りまく三重の蓮華の花卉の上に各々女神がいると説かれている。それらは、一面で、カパーラの輪が手に結びつけられており、カトゥヴァーンガを左右の手で持ち、さらに、手の先に羂索を遊ばせ、もう一方の手に鉤を持ち、身体はピンク色であるとされる⁴³⁾。成就法と壁画の姿を見比べると、一面で三眼を付け、鉤と羂索とカパーラを持つ点が一致している。

次に、門衛についてみてみよう。門衛は三面六臂であり、33-35にみられる。33のペーマイチャクキュ（蓮華鉤）は、三眼を付け、右手に、輪、棒、鉤を、左手に、輪、カトゥヴァーンガ、カパーラを持つ。身体の色は白である。一方、成就法には、この尊が、三眼を付け、鉤、金槌、輪、カパーラ、カトゥヴァーンガを持ち、期剋印⁴⁴⁾を示し、身体の色が白いと説かれている。成就法と壁画の姿を比べると、三眼を付け、輪、カトゥヴァーンガ、カパーラを持ち、身体が白い点が同じである。また、34のペーマイシャクマ（蓮華索）は、三眼を付け、右手は、カパーラ、羂索、棒を持ち、左手は宝珠、カトゥヴァーンガを持ち、期剋印を示す。身体の色は白である。一方、成就

41) 明妃の臂には、本尊の第一臂以下に対応する持物が最上から下へと順に描かれている。

42) 図1の24にあるペーマ・ツェンモは成就法にみられない。

43) P fol. 162b2-6, D fol. 139a3-6。

44) 梵名はタルジャニームドラ（Tarjanimudrā）。人差し指を立てて相手を威嚇する印相である [逸見 1935: 225-226]。

法には、この尊は、三眼を付け、棒、羂索、カパーラ、カトゥヴァーンガ、宝珠を持ち、期剋印を示すと説かれており⁴⁵⁾、成就法と壁画の姿とは持物、印相が同様である。これらの他、35は⁴⁶⁾、面臂数から門衛と思われるが、写真資料の制約から図像の詳細を確認できなかった。

最後に、ダーキニーについてみておこう。これらは一面四臂であり、36-38にある。36のダクボイダタンデンバは、右手にダマル太鼓とカパーラを持ち、左手にカトゥヴァーンガ、鈴を持つ。身体の色は白である。一方、成就法は、マンダラの四隅にいる四人のダーキニーが、すべて同じ姿であり、それは一面四臂で、器、ダマル太鼓、カトゥヴァーンガ、鈴を持つと説いている⁴⁷⁾。壁画と成就法の姿を比べると、持物、印相が同じである。なお、37⁴⁸⁾と38も面臂数からダーキニーと思われるが、写真資料の制約から図像の詳細を確認できなかった。

以上のごとく、女神たちと一部の門衛・ダーキニーに関して、壁画のマンダラの諸尊の姿は蓮華網生起成就法に説かれた姿と概ね一致する。

IV 結び

今回取り上げた蓮華網観自在の姿は、金剛法タイプの観自在を基本としながら、シヴァ神的要素、護法尊的要素、シャクティズムの要素をあわせもち、多種ある観自在の中で、最も重層化した姿をもつものの一つとみなされる。チベット仏教には数多くの観自在の種類が知られているが、蓮華網生起成就法に説かれた観自在の姿は、このペンコル・チューデの作例の他、先述のごとく『ギュデクントゥー』に基づいたゴル(Nor)のマンダラ図像集に一例知られている程度であり、あまり例をみないようである。このペンコル・チューデの仏塔の図像は、蓮華網生起成就法の観自在やそれを取りまく女神たちの姿を比較的忠実に表現しており、既に述べたような成就法に説かれる象徴的意味を反映した、数少ない貴重な例と言える。

謝 辞

論文執筆に際し、立川武蔵先生（国立民族学博物館教授）、正木晃先生（中京女子大学助教授）、谷口富士夫先生（名古屋女子大学講師）、山口しのぶ先生（名城大学非

45) 成就法には、身体の色は説かれていない。

46) 身体は赤色である。

47) P fol. 164a6-8, D fol. 140b3。なお、成就法には、身体の色は説かれていない。

48) 身体は赤色である。

常勤講師) には、貴重な助言をいただきました。記して感謝する次第であります。

文 献

BHATTACHARYA, Benoytosh

1968a *The Sādhanaṁālā*. 2vols. Gaekward's Oriental Series vols. 26, 41, Baroda; Oriental Institute. (First Editions. 1925, 1928).

1968b *The Indian Buddhist Iconography*. Calcutta: Firma K. L. Mukhopadhyay. (Reprint of Second Edition 1958, Revised and Enlarged with 357 Illustrations)

CLARK, Eugene Walter

1965 *Two Lamaistic Pantheons*. New York: Paragon Book Reprint Corp.

ガウタマ・ラトナ・ヴァジュラーダールヤ (画)

1990 『密教図像』8: 26-79。

GOSHIMA, Kiyotaka and Noguchi, Keiya (compiled)

1983 *A Succinct Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Possession of the Faculty of Letters, Kyoto University*. Kyoto.

後藤大用

1989 『観世音菩薩の研究』山喜房仏書林。

羽田野伯酖

1987 『チベット・インド学集成』第三巻 インド篇Ⅰ 法蔵館。

逸見梅栄

1935 『インドにおける礼拝像の形式研究』東洋文庫論集20。

堀内寛仁

1983 『梵・藏・漢対象 初会金剛頂経の研究 梵語校訂編』(上) 高野山大学密教文化研究所。

岩本 裕

1978 『仏教説話の伝承と信仰』仏教説話研究 第三巻 開明書院。

KERN, H. and NANJIO, B. (ed.)

1909 *Saddharmapuṇḍarīka*. Bibliotheca Buddhica X, ST, Pétersburg: Comissionnaires de l'Academie Imperiale des Science.

LANMANN, Charles Rockwell (ed.)

1905 *Atharva-Veda Samhitā*. Harvard Oriental Series vol. 7, Cambridge, Massachusetts; Harvard University. (Translated by Whitney, William Dwight)

LIEBERT, Gösta

1976 *Iconographic Dictionary of the Indian Religions*. Studies in South Asian Culture edited for the Institute of South Asian Archaeology University of Amsterdam by J. E. Van Lohuizen de Leeuw, vol. V, Leiden: E. J. Brill.

LO BUE, Erbert and RICCA, Franco

1993 *The Great Stupa of Gyantse*. London; Serindia Publication.

LOKESH Chandra (ed.)

1967 *The Collected Works of Bu-ston*. (Part 7) Śata-piṭaka Series vol. 47, New Delhi; International Academy of Indian Culture.

LOKESH Chandra

1981 *The 108 forms of Lokeśvara in Hymns and Sculptures*. New Delhi: International Academy of Indian Culture.

1987 *Buddhist Iconography*. 2 vols. New Dehli: Aditya Prakashan.

1988 *The Thousand-Armed Avalokiteśvara*. New Delhi: Indra Gandhi National Center for the Arts, Abhinav Publication.

MALLMANN, M.-TH

1948 *Introduction à l'Étude d'Avalokiteśvara*. Paris: Musée Guimet.

MATSUNAMI, Seiren

- 1965 *The Catalogue of the Sanskrit Manuscripts of the Tokyo University Library*. Tokyo: Suzuki Research Foundation.
- 密教聖典研究会
1986 「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-śarvavajrodaya-梵文テキストと和訳 (I)」『大正大学総合佛教研究所年報』8: 224-260.
- MIRONOV, N. D.
1927 "*Buddhist Miscellanea*", *Journal of the Royal Asiatic Society*: 241-252.
- 森 雅秀
1993 「マハーマーヤーの成就法」『密教図像』11: 23-43.
- SAHITYAŚĀSTRĪ (ED.)
1967 *Nepālarājakiya-Virapustakālayasthahastalikhitasamasta-pustakānām Samkṣiptasūcī-patram*. Purātattvaprakāśanamālā 18, Kāthmāṇḍhū: Virapustakālaya.
- 酒井真典
1956 『チベット密教教理の研究』高野山遍照光院歴世全書刊行会。
- 佐久間留理子
1990 「『サーダナ・マーラー』の梵文写本について」『東海仏教』35: 88-103.
1991 「パーラ朝における観自在菩薩の図像の特徴 (1)」『名古屋大学古川総合研究所資料館報告』7: 109-154。
1992 「パーラ朝における観自在菩薩の図像の特徴 (2)」『名古屋大学古川総合研究所資料館報告』8: 95-114。
1993 「パーラ朝における観自在菩薩の図像の特徴 (3)」『名古屋大学古川総合研究所資料館報告』9: 107-130。
1996 「六字世自在成就法の研究」『東海仏教』41: 83-94.
- 下泉全暁
1981 「Sādhnamālāの京都大学写本について」『印度学仏教学研究』30(1): 136-137.
- BŠOD NAMS RGYA MTSHO
1991 *The Ngor Mandalas of Tibet*. 2 vols. Bibliotheca Codicum Asiaticorum 4, Tokyo; The Centre for Eastern Asian Cultural Studies, The Toyo Bunko (Revised by Tachikawa, Musashi and Onoda, Shunzo and Noguchi, Keiya and Tanaka, Kimiaki).
- SUKTHANKAR, S, Vishnu and BELVALKAR, S. K. and VAIDYA, P. L. (ed.)
1971 *The Mahābhārata*. Poona; Bhandarkar Oriental Institute.
- TACHIKAWA, Musashi and MORI, Masahide and YAMAGUCHI, Shinobu (compiled)
1995 *Five Hundred Buddhist Deities*. Senri Ethnological Reports 2, Osaka: National Museum of Ethnology.
- 高田仁寛
1978 『インド・チベット真言密教の研究』密教学術振興会。
- TAKAOKA, Hidenobu. (ed.)
1981 *A Microfilm Catalogue of the Buddhist Manuscripts in Nepal vol. 1*. Nagoya: Buddhist Library.
- 高岡秀暢
1982 『ネパール百八観音紹介』百八観音木刻図像集刊行会。
- 高岡秀暢 (写真撮影)
1990 『密教図像』8: 82-135.
- TUCCI, Giuseppe
1989a *Gyantse and its Manasteries*. (Part 1), Indo-Tibetica IV.1 New Delhi; Aditya Prakashan. (English Translation editd by Lokesh Chandra).
1989b *Gyantse and its Manasteries*. (Part 2)
1989c *Gyantse and its Manasteries*. (Part 3)
- 頼富本宏・下泉全暁
1994 『密教仏像図典』人文書院。

略号

D: 『デルゲ版西藏大藏経』: *The Nyingma Edition of sDe-dge bKa'-gyur and bsTan-'gyur spon-*

佐久間 蓮華網観自在の図像と観想

sored by The Head Lama of the Tibetan Nyingma Meditation Center. Oakland: Dharma Publishing.

P:『北京版西藏大蔵経』: *Tibetan Tripiṭaka, the Peking Edition*. Suzuki Foundation.